

論文の要旨

論文題目 **Communicative Silence in the Cybersociety of Japan**
サイバー日本社会における沈黙のコミュニケーション

氏名 **黄 雁玲 (Wong Ngan Ling)**

学位 **博士 (文学)**

授与年月日 **平成 17 年 2 月 18 日**

本論文は、コミュニケーションにおける沈黙の使用が日本社会においてどう変容してきたかを時間軸（世代に渡って）に沿って質的調査と量的調査、すなわち2つのアンケートとインタビューを通じて研究した成果である。最初のアンケート調査は、沈黙を意思疎通の手段として考え、沈黙に対する一般認識、感情表現との関わり、沈黙がもたらす意味と機能という3つの側面から、異文化間の相違を見出すことを目的として、海外在住日本人を異文化の人たち、特にイギリス人と比較した。また、沈黙は形式・場と親疎関係の影響によっていかに変化したかということも合わせて調査した。

この調査の結果を土台として、インタビュー調査を行い、①なぜ沈黙の使用は場（公式・非公式）によって変わるのか、②沈黙の使用を助長した、また減少させた要因は何か、③沈黙に対する価値観は世代によっていかに変化してきたかという3つの点に焦点を当てて分析した。

ところで日本社会は一枚岩ではなく、主流文化の中に多数の支流文化が存在する。そのために、上記調査から浮上した沈黙に対する意識を、日本で調査検証する必要があり、第2のアンケート調査を実施した。現在の日本は科学・技術が進み、コンピューター、インターネット機能搭載携帯電話などコミュニケーション・メディア技術によって、時間と空間の抑制から解放された生活にさらされている。この最新型意思疎通手段と、その影響を軽視することはできない。なぜならば、この新手段には、人間の意思伝達の流儀や表現方法を変える力が潜んでいるからである。それゆえ、このアンケート調査では、最新のメディア・技術伝達の影響を視野に入れ、世代差を分析の枠組みとして、コミュニケーションにおける沈黙が世代を通していかに変容したか明らかにすることを目標とした。

以上の結果、沈黙は現代の日本社会においても重要な意思伝達手段として使われていることが明らかとなった。沈黙の使用は、4区分した世代別（戦前派（57才以上）、戦後派（31-56才）、インフォ派（19-30才）、サイバー派（19才以下））による差と、世代内の男女差とが見られる。寡黙文化を保ち、沈黙を美德とした日本人の意識は、世代が下がれば下がるほど薄れつつある。現在の若い世代には、これまで唱えられてきた公式・非公式の場による

感情表出の制限と遠慮が、年配の世代と比べて通用しなくなっており、より言語表現に頼っている傾向がみられる。ただし言葉を通じてはっきり言うという傾向は、50代前半から30代の女性に顕著で、性差による影響度合いがむしろ高い。また、親疎関係によっても意思伝達の手段、すなわち沈黙、口頭言葉、書き言葉、行動表出法は異なり、年配の世代（戦前派と戦後派）は親密な関係にある人物に対しては自分の意思を言葉ではっきりと伝えるが、親しくない相手に対しては非言語行動（顔の表情、手振り身振りなど）を使わず、間接的な方法、すなわち書き言葉や沈黙を用いることが多い。逆にインフォ派はそれと対照的である。最年少のサイバー派はインフォ派と同様、行動によって自分の意思を表現するが、親しくない相手に対しては、逆に戦前派のように書き言葉と沈黙を頻繁に用いる。インフォ派の女性は先行の世代と異なって、親しい関係である親や兄弟に賛成できないことがあれば、口頭ではっきり言うようになったが、インフォ派の男性にはこのような動向がみられなかった。感情を表に出すか出さないかは、世代によって相違が見られる。喜びに対しては、若い世代の方が行動や言葉でより表現する傾向が見られる。一方、不満・怒りを感じたときは、若い世代、特にサイバー派がしばしば沈黙する。

このような世代差、男女差が起こる要因として、日本の「言霊信仰」、共同体から生まれた「空気」、日本の文化・社会構造、コミュニケーション・メディア技術が考えられる。したがって、現代日本人のコミュニケーションにおいては時間とともに変化していき、「沈黙」の持つ意味・機能が変容してきており、特に10代の若者はサイバー社会の影響を強く受けていると結論づけられる。